

夢の降る島シリーズ

夢見の島の眠れる
女神

つごもり おつき
津籠 睦月

～はじめに～

この本はファンタジー小説サイト「[言ノ葉ノ森](#)



で連載していた[オリジナル小説](#)を電子書籍化したものです。

サイトの方では既に完結していますが、編集作業に時間がかかるため、

電子書籍(この本)に関しては、少しずつ更新していく予定です。

また機能の都合上、サイト版よりも機能が減っています。ご了承ください。

～内容のご紹介～

ここは、空から夢が降ってくる島
そして人々の夢が具現化する島一。

幻想と不思議に満ちた島“夢見島”の

どこかには、島の守り神たる
夢見の女神が眠っており、

いつでも夢を見ているという。

島の民は皆、女神とその代理人

“レグナース”たちを崇め暮らしている。

けれど島には一部の者しか知らぬ

不吉な伝承もあった。

数百年に一度、女神の力が不安定になる

時期に、恐ろしい災厄が島を襲うと…。

第1話  は前半
ほのほの

中盤から少～しバトル有り、ほんのり

切ない(?) 初恋風味のファンタジー。

それは、世界の真ん中で眠る

女神をめぐる物語…。

恋愛禁止の女神の代理人と

幼馴染の少年との

淡い初恋の行方は…。

序 忘れられた創世神話

それは途方もない歴史の果てに、語り継ぐ者も途絶えてしまった遠い過去の出来事。世界の創り手が未だ人類と共に暮らしていた時代の、忘れられた最後の記録だ。

「もう、行ってしまわれるのですか？」

粗末な皮衣に身を包んだ少女が問う。“彼、は振り向き、頷いた。

「私の正体が露見してしまった以上、もうここにはいられない。君も見ただろう？ 私が何者かを知った途端、誰もが手前勝手な望みを押しつけた。無論、それを責めるつもりはない。人類とはそういうものだとは何より私自身が知っているからな。だが、偶然に出会ったということを利用してこの集落の人間だけを特別扱いすることはできない。願いを叶えてやれないと知りながら彼らと共に在り続けるのは私にも辛いことなのだよ。もう、この先こうして人間と交わることもないだろう。さらばだ」

「お待ち下さい！」

少女は必死に呼びとめた。

「この先もう人類と関わるつもりが無いと仰るなら、どうかその前に一つだけ、願いをお聞き届け下さい！」

その言葉に“彼、の表情が険しくなる。

「君も私に望むのか。私の言葉を聞いたにも関わらず、一体何を望むと言うのだ？」

「“希望、を」

少女は“彼、の厳しい目にも臆することなく、はっきりと答えた。

「あなたのお創りになったこの世界は、生きる者にとってあまりに苛酷です。心無き獣ならともかく、感情も知性も与えられた我々にはとても耐えられません。どうか、せめて我らに“希望、を与えて下さい。この世を生き抜く支えとなる一欠片の希望を……」

“彼、はしばし沈黙した。噛みしめるように少女の願いを頭の中で巡らせた後、
“彼、は静かに告げた。

「では、お前たちに“世界、をもう一つ贈ろう」

第一章 夢の降る島

灯台の二階にあるその部屋には、一年を通じて夏風が吹き込んでくる。窓辺に吊るしたウィンドチャイムが白い日差しを反射させながら、きらきらした音を奏でていた。

風が運んでくる海の匂いに包まれながら、フィグはベッドに身をもたせ耳を澄ませている。頭に被った大きなヘッドフォンからは鉱石ラジオの微かな音が聞えてきていた。

『昼の白い月が“世界樹の切株、の左肩にかかる頃、
影追いの森の奥、苺ロウソクの野に夢雪が降るでしょう』

潮騒のようなノイズの合間、まるで歌うように響くのは、赤子をあやす母のように優しく美しい声。この島のどこかで眠っているという“夢見の女神、の睡語だ。

フィグは目を開け、机に向かう。便箋を一枚取り出し、ペンで何かを書きつけると、彼はそれを丁寧に折り始めた。

でき上がったのは、先の鋭く尖った紙ヒコーキ。フィグは窓辺に立ち、空を見上げて言葉を放つ。

「花曇りの都のレグナース、ラウラ・フラウラの元へ」

言葉と同時に右手から放たれた白い紙ヒコーキは、すい、と風に乗れ、まるで予め用意された見えないレールの上を滑るかのよう島を中心へ向かい飛んでいった。

見えなくなるまで見送って、フィグは階段を下りる。

「あら、フィグ。出掛けるの？」

「ああ。ちょっと苺ロウソクの野まで夢雪を集めに行ってくる」

母親の声にそう答え、フィグはイスに引っかけてあったカバンと壁に立てかけてあったデッキブラシを手に取り灯台を出た。

岬から島の中心へ向けて伸びる道には、いくつもの白い風車が、からからと音を立て回っている。その向こうには一面のひまわり畑。季節が変わることのないこの

夏風岬では一年を通し当たり前に見られる光景だ。

暑いほどに照りつけていた日差しは道を行くにつれ徐々に弱まり、森の入口にたどり着く頃には初夏のそれに変わっていた。

森に入ろうとしたフィグの頭に、ふいにこつん、と軽いものがぶつかって落ちた。それはどこか丸みを帯びた形のピンク色の紙ヒコーキ。フィグはためらいなくその紙ヒコーキを広げた。

広げた紙には、やはりどこか丸みを帯びた字でこう書かれていた。

『フィグへ。

わかった！すぐ行くね。今度は負けないから！

ラウラより』

フィグは軽いため息をつき、たたんだその手紙をポケットにしまった。

「あいかわらず下手クソな字……。こんなんでも本当に“夢見の娘、になる気かよ”
頭を掻きながら森へと足を踏み入れる。

そこは昼とは思えぬ暗闇の世界だった。茂り合い絡み合う木々の枝が空を完全に覆い隠し、わずかの日光さえも射し込まぬようにしている。だが、そんな暗闇を照らすように、ところどころに光が点っていた。それは木々の枝で白く発光しながら咲き乱れる花々と、淡いライムグリーンちやうむの光を放ちながら宙を舞う蝶の群れ。

たくさんの光源に照らされて、フィグの足下にはいくつもの影ができては消える。揺らめく影たちを追いかけるようにして進む森——これが“影追いの森”という名の所以である。

森を抜けると、そこは一面に苺の実を敷きつめたかのような赤い野原だった。ロウソクともに点る炎のような形で揺れるそれは、赤花詰草クリムソン・クローバーの花穂。苺ロウソクの野と呼ばれるその野原には、既に一人先客がいた。極彩色ごくさいしきの刺繍ししゅうにふちどられた純白のローブを身にまとい、ふわふわした長い髪を苺の形の髪留めかみどでとめたその人物は、フィグの姿を見ると不敵ふていに微笑んだ。

「フィグってばおっそーい！都から来た私の方が早く着いてるってどういうことよ!？」

フィグはムツとして言い返す。

「俺はちゃんと最短ルートを通ってきた。お前が早過ぎなんだ。どうせまた俺を驚かすために無茶な方法で先回りして来たんだらう？ローブの裾すそが汚れてるぞ、ラウラ」

「えっ!?!嘘っ!どどこ!?!まずいよ。またシスターに怒られちゃうっ!」

「自業自得だ。全く、もう十四だらう。そろそろ小女神宮も卒業だっのに落ち着きのない……」

そのまま説教を始めそうなフィグに、ラウラは「しまった」という顔で目をうろろうらせる。その時、ラウラの視界にあるものが映った。

「あーっ！」

ラウラの叫びに、フィグはぎょっとしてその視線を追う。そこには島の中央にそびえる巨大な山の姿があった。頂^{いただき}を常に白い雲に覆われたその茶色い岩山は、その外観がまるで巨木の切株のように見えることから“世界樹の切株”の名で呼ばれている。今、その山頂^{おほ}を覆う雲からひとかたまりの雲が分かれ、翼の生えた船の形に変化してこちらへ飛んでこようとしていた。

「もう“女神の雲船”ができてる！早く準備しなきゃ！」

言いながらラウラは前髪をとめていた髪留めをはずす。それは瞬^{またた}く間にラウラの身の丈の半分はあろうかという長さの杖に変化した。杖の先が丸く湾曲した独特の形状のそれは、まるで柄の先に苺の形の飾りのついた一本の巨大な銀の匙に見えた。この島でレグナースとして生を享けた者のみに贈られる“銀の匙杖”だ。

これからその巨大なスプーンで何かをすくおうとでもするように杖を構え、ラウラはフィグを見つめる。

「ルールは前と同じでいいよね？お題はどうする？」

フィグもカバンを地に置き、デッキブラシを構える。

「じゃあ今回は『世界の幻獣』ってことで」

山から飛んできた船型の雲が見る間に二人の頭上を覆う。そしてそこから砂糖粒のようにきらきら輝く白銀の雪が無数に降り始めた。

「じゃあ、しりとりに夢術合戦・古今東西世界の幻獣スタートだ。まずは俺から」

次々と舞い降りてくる雪は、タンポポの綿毛のようにふわふわと宙に遊ぶ。フィグが空中でデッキブラシを一闪させると、それは磁石で引きつけられたかのようにブラシの先に集まってきた。フィグはそのまま鋭く言葉を発する。

「“夢より紡ぎ出されよ、！北欧神話より“フェンリル、！”

瞬間、白銀の光が弾けた。ブラシの先にかき集められた雪の粒たちが、光を放ち、融合し、形を変えていく。やがてそれは、四肢に足枷、全身にリボンのように細い不思議な素材の鎖を絡みつかせた一匹の狼の姿となった。しゃらしゃらと鎖の音を響かせながら野を駆け回る“フェンリル”の姿にラウラは「おおー」と感嘆の声を上げ拍手する。

「さすがフィグ！すごくリアルな夢晶体だね」

この島には、女神の夢見の力が溶け込んだ目には見えぬ細かな粒“夢粒子”を含んだ雪が降る。“夢雪”と呼ばれるその雪は島の人間の夢見る力に反応し、形を変える。人々は己の夢を具現化させるその技を夢術と呼び、夢術により紡ぎ出したものを、夢粒子の結晶“夢晶体”と呼んでいた。

「感心してる場合か。次はお前の番だぞ」

「そうだった。んー……。フェンリルか……。ル、ル……。よし！決めた！」

ラウラは地に降り積もった夢雪にスプーン状の杖の先端を差し込み、すくうように持ち上げた。

「夢より紡ぎ出されよ！千夜一夜物語より“ルフ鳥”！」

先ほどと同じように、杖の先で光が弾ける。それは宙に舞う他の雪片をも巻き込みながら大きくなっていき、そのまま空高く飛び上がった。

現れたのは、両翼の長さが十五メートルはあろうかという巨鳥。象でも持ち上げられそうな太い脚は鱗で覆われ、そこだけ見るとまるで恐竜の脚のようにさえ見える。体だけ見れば恐ろしい怪鳥。しかし、その首の上についた顔は……

「お前……っ、なんだあの鳥の顔はっ！何で象をも喰い殺す怪鳥があんなつぶらな瞳をしてるんだ。どこの文鳥だあれはっ！ルフは鷲に似た猛禽類のはずだぞ！」

「えー？だってカワイイ方がいいじゃない。怖い顔の鳥さんなんて私、想像できないし」
「……何のための練習だと思ってるんだ、全く。まあいい。ちゃっちゃと次行くぞ。夢より紡ぎ出されよ！『妖精の書』より“ウンディーネ”」

「ウンディーネ……。ネ、ネ……。夢より紡ぎ出されよ！『画凶百鬼夜行』より“猫また”！」

「じゃあ、『今昔百鬼拾遺』より“淹霊王”」

フィグが猫またが完全に紡ぎ出されるより早く言葉を繰り返すと、ラウラは途端にうろたえ、焦ったように杖を振り回した。

「う!?えっと……。えっと……。夢より紡ぎ出されよ、ウンディーネ！」

ラウラの出現させたどことなく幼げなウンディーネのそばに、フィグの出現させていた妖艶なウンディーネが、仲間を見つけたとでも言いたげに嬉しそうに近寄っていく。ラウラはハッとしたようにそれを見た後、がくりとうなだれた。

「そうだった……。ウンディーネはもう出ちゃってたんだっけ……」

「ばーか。こっちにつられてペースを崩すからそういうことになるんだ。今回で何敗目だ？ラウラ」

「うー……っ、次は負けないもん！もう一回勝負しようよ！」

「……いや、今日はもう無理そうだぞ」

フィグはそう言って空を仰ぐ。頭上に浮かんでいた女神の雲船は、いつの間にか見る影もなく小さくすぼみ、そこから降る雪も見えるか見えないかほどの小降りになっていた。

「ええ!?まだ一時間も経ってないのに!?最近夢雪やむの早くない!?!」

「俺に文句を言われても何もできんが、確かに早いな。昔は一日中降っていたこともあったのに……」

フィグは地に積もっていた雪をデッキブラシで掻き集め、カバンから取り出した虹色に透過した小瓶に詰めだした。ラウラも杖の先で雪をすくい、それを手伝う。やがて雲船は完全に姿を消し、それと同時に野に積もっていた雪やフィグとラウラの紡ぎ出した幻獣たちも陽の光に溶けるように消えた。だがフィグが小瓶に詰めた雪だけは溶けずにふわふわと瓶の中で揺れ動き続けている。

フィグは小瓶の蓋をそっと開け、中身をデッキブラシ全体にまんべんなく振りかけた。「夢より紡ぎ出されよ。千夜一夜物語より“魔法の木馬”」

言いながらデッキブラシから手を放すと、ブラシは白銀に輝きながら形を変え、金細工や宝石をちりばめた黒い木馬へと変化した。

「花曇りの都まで送る。乗れよ」

「うん。ありがとう。……ゆっくりでいいからね」

二人を乗せた木馬は音もなく宙に浮き上がり、ラウラの希望通りゆっくりと走り出した。

影追いの森をフィグが入ってきたのとは逆方向へと抜けると、そこは“花歌の園”だった。チューリップによく似た形の花が咲き乱れるそこでは、吹く風の音が他所とは違っている。何かを囁くような音で吹くその風が花弁を揺らすと、花たちは一斉に歌を歌い出す。それは囁くように小さな、しかし一つ一つが重なり合って花園中に響き渡る、ひどく耳に心地良い合唱だった。

「この歌、小さい頃の思い出を歌った歌だね。今日の“歌伝風”はどこの国から吹いてきたのかな」

フィグの背に額を預け、ラウラが囁く。

「“記憶の森”で聴いた覚えがある。確か日本あたりの歌で『思い出のアルバム』とかいう名前の歌だったような気がするが」

「この歌の『イチネンセイ』ってさ、この島で言う小女神宮の一年目と同じことだよな？ フィグは覚えてる？ 私が小女神宮に上がる前のこと」

「……忘れるものか」

フィグのつがや 呟きはラウラの耳には届かなかった。

花歌の園を抜けると、鮮やかな色彩を保ったまま風化した花びらたちにより生み出された“葬花砂漠”そうかさばく が現れる。この砂漠のちょうど中央に位置するオアシスが、この島の中枢であり、ラウラの暮らす“花雲りの都”はなぐも みやこ だ。都は常に薄い黄色や薄紅色をした“花雲”はなぐも おお に覆われ、そこからはいつも雲と同じ色をした花びらが降っている。葬花砂漠の砂は全て、この都の花びらが風に乗って外へ運ばれてきたものだ。

「じゃあ、ここで」

都の外で木馬を降り、ラウラはフィグに手を振る。フィグは都の中へは一緒に行けない。都に入ることを許されているのは小女神宮の関係者と、特別に許可をもらった者だけなのだ。

都へ向かい走り出す小さな背中を、フィグは見えなくなるまでその場で見送った。ラウラは一度も振り返らなかった。

おまけのリンク集

[「夢の降る島シリーズ」サイト版TOPページ](#)

[「夢見の島の眠れる女神」参考文献リスト](#)

[使用画像の素材集リスト](#)

[「夢見の島の眠れる女神」用語集（総合）](#)

[「夢見の島の眠れる女神」ファンタジー用語集](#)

[「夢見の島の眠れる女神」オリジナル設定用語集](#)

[「夢見の島の眠れる女神」パワーストーン辞典](#)

[ファンタジーな雑学・豆知識](#)（←サイト版のおまけコーナーです。）

[ファンタジー資料参考文献（城・宮殿）](#)

[ファンタジー資料参考文献（ファッション・軍服・防具）](#)

夢の降る島シリーズ1~夢見の島の眠れる女神

<http://p.booklog.jp/book/108149>

著者：津籠睦月

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mtsugomori/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108149>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108149>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ